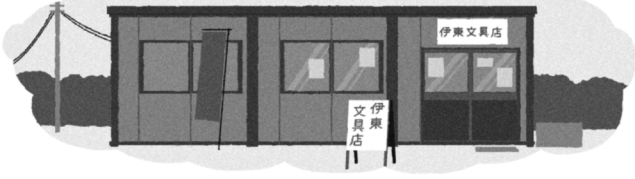


広大なかさ上げ地に、希望をのせた新しいまちの中心地をつくる

岩手県陸前高田市震災復興事業 (2012年◆平成24年～)



東日本大震災の激烈さを物語るモニメントとして、陸前高田市の海岸に佇む「奇跡の一本松」。10メートルを超える大津波は、「仲間」であった7万本もの松の木とともに、陸前高田市市街地のほぼ全てを流し去った。

震災から約5年半。いま、陸前高田市では、被災3県で最大規模の復興まちづくりが進行中だ。新しい陸前高田市の中心市街地は北側へシフトし、かさ上げに必要な土はじつに約1200万㎡(東京ドーム約10個分)、平均で7〜8メートルかさ上げする。高台には新たな住宅地を造成し、全体をコンパクトに集約する計画だ。

壮大な規模の工期を短縮するために導入されたのが、長さ約3キロメートルのベルトコンベヤーだ。銀色に輝くコンベヤーラインが張り巡らされた近未来的な光景は、観光名所にもなり、国内はもちろんのこと、海外からも多くの人が訪れた。昨年、ベルトコンベヤーは工期を6年も縮めて役目を終え、現在は撤去された。かさ上げが進む大地に、少しずつまちの姿が刻まれつつある。

誰もが楽しく過ごせるまちに

去る8月31日。先行して整備が進められている高田地区中心市街地で、核となるショッピングセンターの起工式が行われた。来春には、市民の憩いの場となる「まちなか広場」も同時期にオープン、平成30年にかけて周辺部も次々と整備される予定だ。

陸前高田市企画部商工観光課の村上幸司課長は、感慨深げな面持ちで語る。「分断していたかさ上げ地がつながって平面となり、いままで図面で見られなかった建物が、いよいよ建ちあがってきます。新しい市街地形成のステージに立った気持ちですね」

陸前高田市では、市と商業者、商工会に加え、震災直後から陸前高田市の復興を支援しているUR都市機構とが一体となり、新たなまちづくりを進めてきた。UR都市機構陸前高田復興支援事務所副所長の犬童伸広は、自ら被災地を志願して当地に赴任、3年目を迎える。

「陸前高田いうんは行政と住民や

と思ったほどだったという。その意識が変わったのが、震災直後の仮店舗オープンだった。ほとんどの教科書が流された陸前高田市の学生のために、教科書会社が新学期に合わせて教科書とトラックを手配、伊東さんの文具店もそれに合わせて避難所近くでプレハブ店を開いたという。

「震災から1カ月ちよつとで、みなさんが買い物する気持ちになるのかと不安でした。でも、みなさん、買い物に飢えていたんですね。ほんとに多くの方が訪れてくれて、すごく感謝されたんです。あらためて、うちの店は必要とされていたんだと痛感しました」

地方都市の多くがそうであるように、震災前は陸前高田でも多くの店がシャッターを下ろし、経営に四苦八苦していた店も多かった。が、震災後に仮設商店街などで商売をするうちに、自らの店の存在意義を確認したり、何店か集まって商売をする相乗効果も実感。一緒に頑張ろうという気運が強くなったという。

「我々にとつては、店がオープンしてからが本当のスタートです。地



商業者の距離が近く、みんなが『チーム高田』として話し合っやっついていくのがすばらしいんです。ここに来て、チームの一員になれて幸運やったと思つてます」と早口の関西弁で話す。

今回着工になった高田地区中心市街地は、陸前高田駅の北側に広がる商業エリア。大型スーパーのほか、地域の個店が集まる専門店街や市立図書館、まちなか広場や市民文化会館などが集約され、にぎわいの中心地になる。

新しいまちの特徴の1つが、「歩いて楽しく、車でも便利なまち」だ。メインストリートになる本丸公園通りは、車がスピードを出さないようにゆるいカーブをつけ、歩道にはベンチを設置。歩行者の安全を確保すると同時に、まちなかの賑わいづくりに繋がるように、店の前面には駐車場を作

元の方だけでなく、観光に来た方もリピーターになつてもらえるような、魅力的なまちづくりへの仕掛けもしていきたい」と伊東会長。前述の陸前高田市企画部商工観光課の千葉達さんは語る。

「このまちの商業者のみなさんは、店だけでなく家族を失つた方も多いです。我々も、仲間の多くを亡くしています。その人たちのために、前よりもつとよくなったというまちにしなければ」

高台の造成地でも、昨年からは住宅地が続々と完成。人々が新しいふるさとへと戻りつつある。多くの人の思いをのせて、今日も陸前高田のまちに復興への槌音が響く。



かさ上げ地によいよ本格的なまちづくりが始まる

らないルールも設けた。市民が熱愛する「うごく七夕」のために、山車が集結する場所を作つたほか、山車の動きやすさと見た目のよさを兼ね備えた舗装材を採用した。

また、昔の雰囲気懐かしむ声に応え、震災前の商店街が並ぶかぎ型通路を復元、戸羽太市長が掲げる「ノーマライゼーション」という言葉がいらぬまちにも配慮し、視覚障がい者と車椅子の人が共に安全に過ごせるように点字ブロックの突起の高さや色なども細かく調整したという。

「自分がいままで得た知識や経験が復興まちづくりの手助けになれば、という一念でやってきました。

途中、不安に感じるみなさんのために、工事中の現場で説明会を行い、『あなたのお店はここらへんになるから待つときや』

前にも増していいまちに

「いまはまだ周囲に住宅もなく、工事をしながらの手探りの状態なので正直いつて不安もありますが、いろんな方の支援を受けて、ようやくここまでできました。お客様からも、楽しみだという期待の声が寄せられています」と語るのは、陸前高田商工会の伊東孝会長だ。自らも、創業55年になる文具・書籍店を営む伊東会長。震災では2つの店舗と自宅、弟夫妻と甥をも失った。震災直後は先のことを考えるどころか、これで終わりか

街に、ルネッサンス



一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

【企画制作】新潮社